

芽室町指導農業士会・農業士会

令和2年2月12日(水)

9:00~10:25

■参加者 10人

■出席者 町長、農林課長、農林課長補佐、農林係

■記録 広報広聴係（池田）

1 開会

2 町長挨拶

3 意見交換

【意見】

今年から農業士会に、農協から予算が付くということもあり、「農業士会というのは何をやっているのか」ということを言われる機会がある。後継者対策等色々なことはやっていたのだが、あまり農協の役員さんと主だった接点は無かったので外部から見れば分かりづらい部分はあるかも知れない。

なので、町長さんの言われたような（民泊や体験学習等）部分も含めて、町のほうからも積極的に使っていただければ、農協のほうも含めて我々の意義も伝わるのではないかと感じる。

町に対しても農協に対しても農業者の方々に対しても恩返し出来ることがあればやって行きたくと思っていたが、中々そうした場面が無く、それは我々が自分で探して行かなければと思ってはいたのだが、中々難しい部分もあり、もし町の方もそうした機会が頂ければありがたいし、やらせていただきたい。

今日来ている仲間も結構ファームステイの受け入れ農家ではあるのだが、あまりご協力が出来ていない部分もあり申し訳なく感じているが、これから多少なりとも受け入れ先も広げて行かねばならないし、こうした協力をしていただける農家が広がるということが、すなわち町の食農の理解へと繋がっていく

と思う。

やはり小さい時の体験というのが、農業のことを知る、もしかすると自分でも携わるというきっかけにも繋がると思う。

高校くらいまで行くと、より現実が見えてきて、憧れだけでは先に進めないという部分があるので、逆に小さければ小さい程、小さい頃から思いを強く持っている程、進学等に際してもそうした意識が強く影響するのかなということも含めて、やはり小学生、子供というのがターゲット的には良いかなと感じている。

特に、現代では、芽室町の、全く農家に関係のない子供達も、親が農業関係の会社に勤めていたとしても何をやっているか実感が湧かない子供達も多いと思うので、その中でやはり少しでも体験が出来るということは、子供達の未来にとっても良い経験になると思うので、是非進めていただきたい。

【町長】

農業士さんは基本的には北海道から認定されているが、私としても、仰る通り町の事業でも十分手伝っていただいても良いと思っているし、また、こうした活動を広報誌なんかも含めてPRしていくというのも私達の仕事だと思っている。

今日はまたまこの人数だが、他にも認定されている方は相当いらっしゃるので、一部の方だけにすごく負担が掛かりすぎるということはなるべくしたくないので、少しずつでも手伝って、できればローテーションを組んでやっていただけるという状況になればと思う。

農家民泊も全く同じ。音更町長が受け入れをされているが、あまり肩肘を張ってやると上手く行かないでの、ある意味リラックスして気楽な気分で年1回くらい受け入れるという形だけでもやって行ければと思う。

それでなければ、結局一部の人だけに負担がかかるてしまう。

頑張ろうという反面、集中して一部の人だけというのは大変なので、やはり会全体で受けていただくような形にしたいと思っている。

【意見】

芽室では現在1年に何人卒業するのか？

【町長】

この前の成人式では約200人だった。

【意見】

実際芽室の子供たちの中で、最終的に大人になってこの町で生活する人は何人居るか。

ただ、その中でも、もし他の地域に行ったとしても、町長の仰ったような郷土愛はずっと大切なものだと思う。

特に、都会に行って精神を病んだ時には心のふるさとが一番大事なのではないか。

実際に、例えば都会に出て「どこから来たのか」と聞かれた時にただ「田舎から」で簡単に済ませてしまう人も多いが、芽室は農業の町とは言っても、実際に身近で何を作っているのか等は確かに実感が湧きづらいと思う。

例えば、自分の家は味の素のカップスープの原料を作っているが、高校生に「この原料を作っているんだよ」と見せると、10人中8人は「これいつも飲んでる！」「すごいね！」と身近に感じてくれる。そして、普段の生活の中で身近なを感じられるというのが大切だと感じる。

先程の話に戻るが、小学生等の子供をターゲットにすることによって、そのご両親やおじいちゃん・おばあちゃんもそれに付随すると思う。また、やはりおじいちゃん・おばあちゃんというの昔そうしたこと(農業関係)に携わった方も居ると思うので、孫との話題も出来る。

一番大きいのは、行政として、農業に力を入れていますという部分を、ごく一般的な町民からどのように捉えられるかということ。

そこの結び付きがちゃんと出来て初めて、町民の方にも「農業の町だ」と実感していただけるのだと思う。

自分はお蔭様で20年以上やらせて頂いているが、自治体でその肩書きで活動することが何も無ければ、

単なる名誉職になってしまう。

実際に全道的に言えば、逆に名誉職的に捉えて認証してしまっている地区もある。昔は違ったかも知れないが、今はそれではいけない。後継者育成という視点に立ち、それぞれの町村で活用していただかなければ、十勝全体が荒んでしまうことにも繋がりかねない。

実際に何かをやるというのは大変だと思うが、その大変さを色々な面で自分のものにしていかなくてはならない。

受け入れについても、勿論大変なことは大変だが、それ以上に楽しみがあるからやっているのであって、やはりそれがノルマのようになってしまうのでは駄目。

【町長】

全くその通りだと感じる。

今まで知られていなかった活動のアピールも含めて良いチャンスであると思っている。

当初、担当とも色々話していく中で、どういう方々に指導をお願いしようかと考えた。

折角、後継者も含めて指導できるようなノウハウを持っていらっしゃる農業士さんに活躍していただかない手は無い、というのが私の発想でもある。皆さんに賛同頂いてご協力いただければ本当に嬉しい。

皆さん経営の方々ばかりということで大変な面もあるのは重々承知だが、町からも何とかお願いしたいと思っている。

【意見】

まるごと給食について。

やはり地産地消ということで、そこで農業の話も出来るということもあって、体作りや食の教育の観点からも良い機会とは感じている。

ところが、この何年か、お味噌が、地元の味噌ではなく、今まで使っていた方の味噌が使えなくなつただとかで、本別の味噌が使われているということを聞いており、お母さん方にも相談をいただく。私も農家として自分の家の味噌は自分で作っているし、

他の農家のお母さん達も全員が全員ではないが、そうしているご家庭が多い。他のものが嫌いという子供でも味噌汁だけは飲める子も多いので、味噌はやはり大事だと日頃から感じている。

子育ては町みんなでやるものと思っているので、こうした民間の力なども借りて人を集めて、例えば大豆は農協から買ったりして、再び町内産の味噌を復活させられるのではないか。

ただ、場所などの問題もあり、何から手を着けたら良いかという部分はあるので、是非町のほうでも早急に考えていただきたいと思う。

【町長】

私が農林課を担当していた時からお話はあって、今仰った通り、前は芽室さんの物を使っていたがその方が辞められて、ロットの問題があつてやはり一定程度使うため、町内産ではとても間に合わないとすることになって、本別の会社にお願いして使わせていただいている。

やはりロットの問題と、やれる方が中々居ないというのが大きな問題だが、「みのり～む」でも加工研究は出来ることになっているが、現在、町として、折角農産物があるのだから、それを加工・研究に挑戦できるような施設を建てられないか、というお話を実はいただいている。

味噌に限らず、もっと製品にすごく近づけられるようなもの、要するに原材料をそのままというではなく、加工をして付加価値を高めるということを挑戦できるような所を作ってくれという要望が実は結構ある。なので、こうした施設の建設も含めて考えて行かねばならない。

今、実は中心市街地が疲弊してきていて、これを早急に何とかしなくてはという思いの中、出来るかどうかは分からぬが、ある町では一角を町で全部買い取って飲食店の集まった場所を作っている所もあるし、それにプラスしてこうした加工にも挑戦できる場を作つはどうかという案もある。

それが芽室で実現するかは別としても、こうした発想というのがこれから大切になってくると思う。

後は受け皿で、味噌の件についても、例えば農家の

お母さん達も含めて、やる気になっていただいて会社でも興していただければ、本当にすぐにでも戻したいという気持ちはある。

【意見】

本当に私たち世代の、仕事の終わったお母さん達、時間の空いている人達は沢山いる。女性だけでなく男性も、何をしたいか決めかねている人が多く、こうした方々がやはり自分の居場所を探せるような町になると、人も外に流れないとと思う。

外部からも含め、「子育てに良い町だね」という意見は良く聞くし、他から移つて来た方もいらっしゃるが、世代別の居場所のような所があればいいなと思っている。

【町長】

まず、味噌等について。給食というのは毎日のことであり、穴を開ける訳にはいかないので、継続してずっと長くやれる所でないといけない。そこはロットという部分もあり、例えば「今日は3キロしか作れませんでした」「5キロしか作れませんでした」となってしまうのは困るので、難しい問題。

【意見】

まさにその部分を私たちも悩んでいます。やはり一番難しいのは量を作らなければいけないということと、そのための人数の確保。

【町長】

責任も持つていただきなければならぬので、その為にはやはり会社と契約してやっていかなくてはならない。個人でその日来られる・来られないという問題だと出来なくなってしまうので。その組織体制まで出来た上で供給していただけるという所まで持つていかないと厳しいとは思う。そのお手伝いを町としてやるということはできると思う。

【意見】

現状、残念だとは思う。作っていないというなら

ともかく、折角芽室町でも大豆を作っているのに。

で。

【町長】

そこは、単価は多少高くて良いとは思っているのだが、何せ受け皿が今はまだ無い状態である。

【意見】

そうした（会社を作ろうという）話が出たことはあるが、営利的な話になるとやはり制約等の問題があつて立ち消えになってしまふので、結局環境が揃つていなければ、やりたい気持ちはあっても出来ないという現状がある。

【町長】

結局、製品というレベルになつてしまふとあの施設では駄目という話になるから、確かにそこが難しいと感じる。端的に言うと、「チャレンジできない」と言つられた。色々やりたいのだけれど、体験でちょっとやってみても製品にならないからということです。

【意見】

そういう所があれば、実際に農家以外の人が地場産品を使ってできると思う。

【意見】

九神ファームさんが、現在、色々芽室町から芋などを買って、加工しているが、やはり九神ファームさんも「ばあばのお昼ごはん」の仕事でいっぱいいっぱい。

【町長】

確かに、そこもまたロットの問題。昼食に出すレベルの量であれば良いが、やはり全校生徒ということを考えると 2000 食という単位で必要なので。

ただ、芽室産のものはどこに行っても「十勝・芽室の」と名が付ければ人気というのもあって、今後何らかの手段を考えていく必要は感じている。

要は、給食のこととなるとどうしてもロットと安定供給という問題が出てくるので厳しい。

栄養士がちゃんと栄養を考えて献立を作っているの

【意見】

前向きに検討していただければと思う。

【町長】

理解した。確かに、折角、良い素材（作物）が沢山あるのだから、加工出来るのであればやりたい。

【意見】

質問。ふるさと納税の返礼品はどのようにして決めている？

【町長】

出したいというお店等から申請をもらって、規定により 3 割以下になっているか確認した上で決めている。

余談だが、今私が着目しているのが「企業版ふるさと納税」。これは、元々 6 割の控除だったのが去年の改正で 9 割になったもので、例えば 10 万円寄付したら 9 万円は控除される。

加えて、企業としては地域に貢献できるというメリットもあり、企業イメージも上がる。

条件としては、芽室ではなく他の町に本社がある所に限定される。

概要としては、町側がプロジェクト、「こういうものに使いたいので」ということで提案して、それに応じて企業が乗るという形式になっている。

【意見】

私は食農同好会という所に入っているが、先日、そこに西田補佐から、今回十勝で 23 区と交流することによって、今回墨田区さんと芽室との交流事業があるからそこで食事を作つて欲しいというお話をいただいた。

その時に、農協さんにもお伝えして、私達は女性部だし、こうした都会とのつながりの際には農協も関わつた方が良いよねということでこうした話になつたが、これからもそうして私達農業者と農協とが密に関われば、都会の方たちや町の人達、子供達

とも色々と交流が出来るのかなと感じた。

【町長】

そう思う。町としても現在その部分はすごく力を入れている。

墨田区は相撲の地域なので、現在ちゃんと鍋に関するプロジェクトもある。もう協定を結んでいるので、台東区・墨田区には私も行ってきて、区長さん方にもお会いして交流を進めている。

地域の人口的にも交流には丁度良く、彼らもやはり北海道への憧れもあるので、それこそ移住まで行かなくても、関係人口という意味ではかなり大きい。なので、私も、企業に対して「こういう計画なんですね」というパッケージを持ってセールスしようと思っている。

【意見】

やはり今回もそうだが、「こういうことをやりたい」となった時に、それをやってくれる団体、どこにどういう人が居るかということを把握していく必要があると思う。

やはり皆さん、誰に言えばいいのか、どこに掛け合えば良いのか分かりづらく行動に移せないという部分は大きいと思うので。やはりこうした事業が増えていく上で、人の把握は大切なことだと思う。

【町長】

今回は帯広市がやらず他の18町村はやるということになって、現状芽室が一番（墨田区と）交流している所であり、後悔の残らないくらいどんどんやれという勢い。

職員も実際に販売にも行っているし、これからも積極的に交流していきたいと思っている。向こうの、食育 good (グー) ネットだったか、そこも非常に食育に前向きで、芽室と繋がりたいと言っていただいている。

西部十勝と向こうとの交流が盛んな、このチャンスを逃してはいけないと思っている。

【意見】

そうした部分はどんどん町民にも伝えるべき。一部の人がやっているのではなく、町全体でやるのは大事だと思うので。中々、すまいるだけでは難しい部分もあるので何かしたものに関する行事、例えば向こうの物産展のようなものなどがやれたらと思う。この機会に出していくか手は無いので。

【意見】

これは子供達の食育にも関係のある意見になるが、これから後継者の部分でやはり考えなければいけないのは、独り者でいては、結局はいずれ戸数は減ってしまうということ。なので本当に危機的状況にあると思う。

最近、役場のほうからも所謂婚活、カップリングパーティのような発想も来ているが、当の若者たちはそうしたものをただ見ているだけでその気にならない。紙一枚では気持ちが付いて来ないとあると思うし、勧める側と直接お互い面と向かって「こうしようよ」ということを言い合わないと進まないと思う。芽室だけでなく、周りの地域の男性を見ていてもどこもそんな感じで、「自分は当事者・該当者じゃない」と思ってしまっている。自分で意識しなければ駄目だとは思うかもしれないが、やはり今の子というのはあまり積極的に外に出ない子も多く、難しい。また、「婚活」ありきというと引いてしまう人も多いので、夏場に例えスイートコーンの収穫体験や、女の方でスイーツ関係が好きな人が多いということでパン作りをしている町民の方とコラボしたりして色々なイベントを企画することも大切と思う。こうした行事によって外部の人を芽室町に迎え入れる方向も検討してはどうか。求めている人については心配ないが、求めていないという人が多いのが問題。

【意見】

同意する。皆でパンを作ろうとか、イベントで協力して何かを盛り上げようという所で「この人、こんなに優しいんだ」とか「この人随分気が付く人だな」という、ただ話しただけでは分からぬそれぞれの良さが感じられると思う。

今までのように「お見合い」を前面に押し出すのではなく、何かそうした皆で動けるイベントがあれば良いと感じる。

【意見】

子供達に関する政策や教育は大切だけど、今後のことを考えた上ではそうした大人たちの部分も大切にしなければいけない。

【意見】

今の子はゲームが好きだから外に出ないという傾向はあるが、逆に対戦などのゲームで他者と交流している人たちも見る。

青年部が以前の交流の時に大きな画面を使ってゲーム対抗戦をしたとも聞いた。

今はeスポーツというものがあるから、いっそそれをメインで交流したら良いのではないかと感じる。

【意見】

そもそも喋るのが苦手な人も多い。インターネットで、絵文字などではコミュニケーションを取れるが、面と向かっては話せない人など。

【意見】

それは大いにあると思う。我々が「普通」と考えていること（積極性など）が、最近の人にとては非常にハードルが高いという部分はある。やはり「自主的に」というのが、当人達が押し付けられていると感じないために大切とは思うが、そうして自ら動けるような環境づくりが重要。青年部にも、活動の一つとして、自分達でそういう風にやってもらえば一番良いよねという話はしているが、我々からの押し付けではやはりもう振り向いてはもらえない。

【町長】

結婚相談員という方がいるので、その方々とも未来ミーティングをやった。

そこで聞いたのが、結局相談体制があっても、相談員が昔から知っているおじさん・おばさんでは抵抗があるということや、知っている人から結婚につ

いてあれこれ言わされたくないという人が多いとのこと。なので、地域の人ではなく、逆に専門の第三者の人が相談を受ける窓口があれば良いのではないかというのが相談員の方々の考え方。良く言われるのは、事務局というかキーパーソンのような人を町として雇ってもらってという手法で、富良野はそうしたやり方。皆さん情報を見ていて、先程の話のようにただ紙を配るというのではなく、それぞれ個人に合わせた面談をしたりする。要望としてはいただいているが、結局最後は個人個人の問題なので難しい課題もある。相談できる体制だけは確立したいと思っている。今はやはり個別にやらないと、集団で、お見合いパーティで何とかなるという問題ではないという話も聞いている。

【意見】

本人がその気になっていないというのが気になる。周りに同世代の独身が多いから気にならない、大丈夫だなと思うとのこと。

【意見】

今は4分の1が結婚したくないし、彼女も欲しくないという。自分1人が楽すぎるらしい。

「良い出会いがあれば結婚したい」というのではなく、最初から要らないと思ってしまうというのは大変なことだと思う。

【意見】

結局はやはりアプローチの仕方が重要。例えば、青年部の活動に必ず女子職員も自然に参加するような機会も作らないと、行け行けというだけでは駄目。

仕事としてでなく、それ以外の所で「また一緒にご飯でも食べたいね」というような話が出来る場を作ってやらないといけないと思う。

【町長】

ちょっとしたきっかけ作りくらいであればしても良いが、やはりあまり強引に押し付けるということは出来ないので難しい所もある。

結局、本人が結婚したくない、お付き合いもしたくないというと何とも出来ない。

状無いというのがジレンマ。
今後、仕組みをもう少し考えていく必要がある。

【意見】

(10:25 終了)

農業というのは家業という部分が大きく、家族経営をしてきたことにより、後継者問題はすごく大事だと思うが、それを一旦置いておくとして、今の時代、結婚をしたから必ず良い人生か、と言われると必ずともそうでないという流れになってきている。結婚せずとも自分らしく居ればそれは幸せな人生だし、結婚しても苦しんでいる人も見かける、結婚がすべてではないという時代になっているのを感じる。農業の後継者という点では、やはり自分の子供たちに継いでもらいたいという親の思いがあるので、そうした面では大事だとも思うが、農業だけでなく商業なども含め結婚していない人が増えているというのは、そういう時代の流れもあるのではないか。

【意見】

結婚した後、お嫁さんが一生続けていきたい仕事を持っていたとして、ではそこでどのようにやって行くかということとか、親がやっているから本当は違うことをやりたいが農業をやるだとか、そうした子供の気持ちを親がきちんと理解・把握していることがまず大切だと思う。

【意見】

事務局も含めて、一生懸命実を結ぶように企画を考えていただいているが、中々手を挙げてくれない、挙げてくれたとしても一人二人で中止になり次から挙げてくれなくなるということもあるので、本当に難しい。

【町長】

去年、大阪の移住フェアに顔を出した所、本当に真面目に農家に嫁ぎたいという女性の方が居た。酪農も含めて経験もしているし、何度も芽室に来ている方。

そうした方も実際にいるのに、先程言ったように、要望を持った人と農家とを上手く繋ぐシステムが現